3.11 ソレカラ

～障害者・福祉職員の「あの日」と「ソレカラ」～

◎小山賢一さん（男性／当時30代／盲ろう者［弱視難聴］）

# 盲ろう者は身近にいる。盲ろう者のことをもっと知ってほしい。

― 取材時の様子 ―

― 宮城県視覚障害者情報センター ―

## みなし仮設

### 地元を離れて空き家に入居。困難はあるがプライベート空間が保てたことに感謝。

小山さんを含め同居の家族は全員無事でしたが、自宅は津波で全壊流失してしまいました。そのため発災時に避難した避難所で2ヶ月半過ごした後、地元から少し離れた空き家をみなし仮設住宅とし、約5年間住むことになりました。しばらく住人が不在だったその家は障害者に対応する造りではなく、屋内でも自由に動けず、空間になれるまで時間がかかりましたが、住む所がない状況の中で家を貸してもらえたこと、それによって家族のプライベート空間が保たれたことなどに大変感謝しているといいます。

## 支援

### 震災後、支援団体や障害者仲間とつながり、ネットワークが全国へ。

自宅から避難所、みなし仮設住宅へと移ったことで生活環境が激変し、外出も難しくなった小山さんは、外部との交流も減ってしまいました。これではいけないと、わずかに見えていた携帯電話で検索し「仙台市中途視覚障害者支援センター」の存在を知り、足を運びました。そこで、障害者手帳の申請や白杖歩行訓練、点字訓練などさまざまな支援があることを知り、状況が急速に変わっていきました。点字訓練を受けた視覚障害者情報センターの職員に紹介され、「みやぎ盲ろう児・者友の会」の交流会や全国盲ろう者大会に参加して、全国の盲ろう者仲間や支援者と出会い、つながり、交流が全国に広がったのです。

## 啓蒙活動

### 当事者として、盲ろう者の障害の理解や支援のニーズ等を伝える活動を始める。

全国の盲ろう者やその支援者とつながって感じたことや自身の経験を通して、小山さんは「地域や社会に知ってほしいこと」として盲ろう者の困難や支援のニーズを整理しました。まず伝えたいのは、盲ろうの障害の程度、コミュニケーション方法は一人一人異なり、支援のニーズも異なる点です。例えば、小山さんのように弱視難聴で、近くでゆっくりはっきり話してもらえれば会話ができる人もいれば、音としては聞こえるけれど言葉としては聞き取れない人もいます。そうした盲ろう者の障害の程度によって、音声、筆記、指点字、指文字や触手話、手のひら書きなど、様々なコミュニケーション方法があります。ほかにも「聴覚障害者は手話でコミュニケーションする」という健常者の既成概念とは違い、手話を使う聴覚障害者は全体の2割にも満たないという現実があることも伝えています。

また、盲ろう者に声をかける時は、静かにポンポンと体に触れてから声をかけてもらいたいといいます。「盲ろうの方はいきなり声をかけられると、びっくりします。見えなくて聞こえない盲ろう者は、すぐに状況がわからないため、“こういう者ですが、何かお手伝いが必要ですか？”など、相手の状況を確認してから支援していただけるとありがたいです。また“今、○○さんがこんな風にしています”など状況を説明してもらうだけで、自分で考えて動けるようになる場合もあります。」と話します。小山さんはこのように当事者が社会に出て啓蒙活動を続けることで盲ろう者への理解が進み、盲ろう者が社会から孤立することなく人間らしく生活でき、必要な時に必要な支援が受けられる社会が訪れることを望んでいます。